

2020年1月4日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 石島 このみ
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 母子のくすぐり遊びにおける相互作用の初期発達
論文題目（英文） Early Development of Mother-Infant Interaction in Tickling Play

公開審査会

実施年月日・時間 2019年11月26日・13:00-14:30
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第四会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	根ヶ山 光一	博士（人間科学）	大阪大学	発達行動学
副査	早稲田大学・教授	外山 紀子	博士(学術)	東京工業大学	発達心理学
副査	早稲田大学・教授	古山 宣洋	Ph. D. (Psychology)	シカゴ大学	生態心理学
副査	早稲田大学・名誉教授	三浦 慎悟	理学博士	京都大学	動物生態学

論文審査委員会は、石島このみ氏による博士学位論文「母子のくすぐり遊びにおける相互作用の初期発達」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1. 質問：くすぐり遊びにおける満足度や充足度といったパラメータを検討する必要があるのではないか。
回答：くすぐったがり反応が生じた際の母子の行動（笑い、くすぐったがり、視線）が満足度や充足度のパラメータとなりうると考えている。今後、くすぐり遊びがうまくいったか等の主観的評価もパラメータとして考えたい。
- 1.2. 質問：くすぐり遊びをすることの母親にとってのメリット（適応的意義）とは何か。
回答：母親は自身の身体をベースとしながら同型的な乳児の身体をくすぐっており、くすぐったがり反応は疎通性や一体感を強める効果があろう。
- 1.3. 質問：母親にくすぐり遊びをするよう依頼するという手法は母親の行動に影響を与えてはいないか。母親へのインタビュー等も必要ではないか。

回答：自然なくすぐり遊びの発生頻度は高くないため母親にくすぐり遊びをするよう依頼したが、それによる影響が多少生じている可能性は否定できない。インタビューについては、今後の課題としたい。

- 1.4. 質問：感覚を伴わない二項関係はないとすれば、原三項関係は二項関係の中に埋め込まれているとすることも可能ではないか。

回答：くすぐったさという特殊な身体感覚ゆえに、二項関係から三項関係への移行という独自の過程があると考ええる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 導入部ではもっと研究に直接関わる問題を十分に論じるべきである。
- 2.1.2 研究1・2の議論を「ナラティブ」という概念で貫き、諸概念をマルチモーダルに説明するとともに、その相互関連性についても言及すべきである。
- 2.1.3 Bruner が論じているやりとりの「型」と、Malloch らが論じている Communicative Musicality における「ナラティブ」の違いがわかるように論じるべきである。
- 2.1.4 研究1で1事例の縦断研究だけでなく他事例の分析も加えるべきである。もしくは1事例に限定した根拠を示すべきである。
- 2.1.5 総合考察がややまとまりに欠けるので、諸概念の相互関連性など考察を深める必要がある。
- 2.1.6 誤字脱字、表記のゆれがある。また、博士論文のベースが査読・掲載済の論文である旨の記述がない。
- 2.1.7 くすぐり行動の定義を明確化する必要がある。
- 2.1.8 二項関係と原三項関係の関連性について新たに独自の理論構築をしてほしい。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 ソーシャルタッチに関する言及を加え、さらに事例研究を行った根拠を示した。
- 2.2.2 導入部で研究に関連する節を新たに加筆した。
- 2.2.3 くすぐり行動の定義を加筆した。
- 2.2.4 研究1において「ナラティブ」という概念を用いて論じた。
- 2.2.5 総合考察において、二項関係・三項関係と第一次間主観性・第二次間主観性、フォーマットとナラティブなど諸概念を相互に関連づけて論じた。
- 2.2.6 誤字脱字、表記のゆれについて見直した。また、博士論文のベースが査読・掲載済の論文である旨の記述を行った。
- 2.2.7 「抱き」と対比させながら、くすぐり遊びにおける原三項関係の独自性について「身体性を基盤とした母親による足場づくり」の観点から論じた。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、母子における身体接触、なかでもくす

ぐり遊びという日常のありふれた行動に対して、そこに生起する「くすぐったさ」という独特の感覚に着目し、それが単に母親から子どもへの身体刺激とそれに対する子どもの反応というだけではなく、接触を核にしつつ音声や表情をまじえた母親と子ども間のマルチモーダルなインタラクションであること、そしてくすぐったさが「他者性」を前提として成立する母子間の間主観的現象であることについて、行動観察をもとに詳細に検討した。その目的は明確であり、妥当なものである。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文は家庭における事例の多面的な縦断的追跡研究と子育て施設における複数事例の横断的研究という 2 種類のフィールド研究を併用し、それぞれの手法の長所を活かしつつ、くすぐり遊びの発達過程を詳細に検討している。用いられたマイクロ分析は行動相互の発現の時系列的関連性を解明するのに有効であり、それを音声と身体接触行動、表情など視聴触覚にまたがるマルチモーダルな相互作用に適用することによって、くすぐり遊びをその導入から終息まで一連の文脈をもつものとして検討している。さらに同一児におけるくすぐったさの生じたくすぐりの成立例と不成立例の比較を行うことで、くすぐりの成立する行動連鎖の特徴を明らかにしている。これらは、母子のくすぐり遊びとくすぐったさの発達を多面的に研究するための方法論として明確で妥当なものである。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文は適切な目的意識と方法の採用により、くすぐりが子どもの身体の特定位点に向けられた母親の多様な接触行動群による一連の遊びであること、くすぐったさが他者によってはじめて惹起されうる特殊な社会的感情であること、その展開には起承転結の文脈性がみられ、母子双方がその文脈性をマルチモーダルに共有・共創すること、それは母子に対称的な共振的体験をもたらし、意図の読みとりや三項関係の発達に独自の重要性を果たしていることなど、いずれも貴重な指摘を生んでいる。その成果は発達行動学的に重要であり、明確性・妥当性が認められる。

3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 視聴覚に比して従来あまり重視されてこなかった触覚に着目し、それが初期の母子関係にとって重要であることをくすぐりとくすぐったさを通じて実証した。

3.4.2 くすぐり遊びにおける母子の相互行為を Communicative musicality としてとらえ、その文脈性のなかに両者間の意図の読みとりを指摘した。

3.4.3 母子のやりとりは二項関係であるが、母親が子どもの身体部位を対象化して関わり、両者がそこに意識を重ねるくすぐりには三項関係の前駆的状态（原三項性）が含まれる、という重要な側面を行動連鎖から実証した。

3.4.4 くすぐったさは、原三項性が子どもに萌芽的な意図の読みとりを誘発することによって生じるヒト独特の社会的感情である、という独自の視点を提示した。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本論文は母子関係における身体接触の意義という新たな研究課題に、特定身体部位へのくすぐりという行動とくすぐったさという感情に焦点化して適切に取り組んでいる。

- 3.5.2 本論文は、母子関係には身体接触を核としたマルチモーダルなやり取りが重要であることを説得力をもって実証しており、今後の母子関係の理解にとって新たな枠組みを提供するものとなっている。
- 3.5.3 本論文のなかで考察された共創的母子像を支える子どもの能動性や主体性は、今日の社会に欠落しがちな視点として、保育や育児の実践にとって大きな意義がある。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 行動、身体、タッチ、発達、母子関係、音楽性、間主観性など、本論文でとりあげられた諸問題はいずれも人間科学の重要なテーマであり、今後の研究を賦活するものと期待される。
- 3.6.2 なかでも、本論文でとりあげられた触覚をベースにしたマルチモダリティの問題は認知科学・福祉学領域などと、くすぐったさと自他の分化の問題は神経科学領域などと、意図の読みとりや間主観性として考察された母子関係の問題は臨床心理学や発達心理学領域などと、ヒトの独自性の議論は進化学・人間行動学・文化人類学領域などと、それぞれ深く関連する。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
- ・石島このみ・根ヶ山光一（2013）乳児と母親のくすぐり遊びにおける相互作用：文脈の共有を通じた意図の読みとり. *発達心理学研究*, 24(3), 326-336.
 - ・Konomi Ishijima & Koichi Negayama (2017) Development of mother-infant interaction in tickling play: The relationship between infants' ticklishness and social behaviors. *Infant Behavior & Development*, 49, 161-167.
 - ・石島このみ・根ヶ山光一・百瀬桂子（2012）母子のくすぐり遊びにおける行動のマイクロ分析. *電子情報通信学会技術研究報告*, *電子情報通信学会*, 111(464), 9-14.
- 5 結論
- 以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上